

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

101  
WINTER  
2025

# ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



## アウトリーチ展開事業「とびだせ！びはく」開催報告

今年の十月から、いよいよ美術博物館が二年弱の改修工事休館に突入しました。バブル期に建設された岡崎市内の公共施設の大規模改修ラッシュが近年続いており、当館をはじめとした公共施設が利用できず寂しいというお声には、市役所職員の端くれとして申し訳なく思います。

そんなお声に少しでもお応えすべく、当館では休館に入ったこの秋から、アウトリーチ展開事業「とびだせ！びはく」を始めました。中央総合公園の山を飛び出して、市内のQRUWAエリアを中心としたまちなかを会場に、ワークショップをはじめとしたイベントを開催しようという試みです。ここでは、すでに実施したものをいくつかご紹介いたします。



#みんなのびはくカンバッジ オカザえもん来場



#みんなのびはくカンバッジ 制作風景とカンバッジ見本

## ワークショップ

## 「#みんなのびはくカンバッジ」

美術博物館の収蔵品の中から厳選した作品をオリジナルのシールにして、このシールを素材に自由にカンバッジを作るワークショップです。十一月九日（土）、十日（日）に開催し、図書館交流プラザりぶらで開催していた「オカザえもんの芸術祭2024」に出展しました。

多くの方が行き交う通路横で開催した効果もあり、ワークショップを目的に来場された方よりも、たまたま通りかかってご参加いただいた方が多かった印象です。子供から大人まで、みなさん夢中になってこだわりのカンバッジを制作していらつしやいました。普段は当館になかなか足を運べない方へ、工事休館の案内とアプリができたのではないかと感じています。

## ワークショップ

## 「ぬいぐるみで絵画をつくらう！」

この春に開催した「ひらいて、むすんで」展で取り上げた現代美術作家の植松ゆりか氏を講師に、同氏の作品



ぬいぐるみで絵画をつくらう！ 制作風景

《soft toys》シリーズと同じ技法でぬいぐるみを絵画に仕立てるワークショップです。十二月十四日（土）、市内の中央緑道沿いにあるMaysayoshi Suzuki Galleryを会場に、じっくり時間をかけて自分だけの作品を制作しました。柔らかかなぬいぐるみを額に収め、特殊な素材を使って固く仕上げる工程は、まるで手術のよう。ひとつの作品に詰め込まれた技術上の工夫を体験いただきました。またそれだけではなく、展示会で飾ってある作品では（ほとんど触れないので）じっくり味わえなかった、ぬいぐるみの見た目と質感の間にうまれるギャップ、またそこに作家が込めた意味を感じ取っていただく機会となりました。

## ホームページ

## 「岡崎市美術館 収蔵品検索」

常設展示室がなく、収蔵品目録もない……まさに三重苦の当館ですが、休館中でも少しでも収蔵品を知っていただく機会を設けたいという思いから、簡易的な収蔵品検索データベースを作成、公開を始めました。岡崎市が導入しているノーコード開発ツール「kintone」を活用したもので、「とびだせ！びはく」に登場した収蔵品の情報を中心に公開しています。システムの仕様上、Googleなどの検索サイトからは検索できないのが玉に瑕。ぜひURLやQRコードから直接サイトにアクセスのうえ、お楽しみください。

この後は、三月一日（土）に現代美術作家の宮田明日鹿氏によるワークショップ「出張手芸部in岡崎Ⅲ」も予定しています。また、「とびだせ！びはく」を令和七年度も継続できるよう、目下いろいろと企画・調整中です。今後の詳細は決まり次第、当館ホームページや公式インスタグラム・フェイスブックでお知らせいたします。アルカディアともども、こちらもぜひチェックをお願いいたします。

酒井

明日香

ワークシートが美しすぎた件  
— QuizKnockと巡る江戸東京博物館展 ワークシートを振り返る

山下 葵

「QuizKnockと巡る江戸東京博物館展」では、多くの子どもたちにより深く展示を楽しんでもらうため、「江戸を学ぼう!!ワークシート」と題して五種のワークシートと解説シートを一枚制作した。会期を通してほとんど配りきることが叶い、多くの来館者にお楽しみいただけたようである。

今回のワークシートは、展覧会の全体についてはなく、出品資料のうち五点に絞って、その対象の資料をじっくりと見る仕掛けとした。いわゆる「お勉強」をするワークシートではなく、展示を見ながら手を動かすアクティビティシートの側面が強い。とにかく資料の前で、一定時間を止めて、そのものと向き合っている。それが制作者の願いであった。

小学校低学年から中学生を主なターゲットとしていた。来館した子どもたちのほとんどがワークシートを手持っていた。親子で該当の資料を探しながら楽しむ様子も多々見られた。一方で、大人でも熱心にワークシートを埋める姿がかなり見られた。

来館者アンケートでもワークシートに言及しているアンケートは多く、おおむね好評な印象であった。

●美しすぎたワークシート

今回のワークシートは少々美しすぎた。というのが最大の反省点である。幸運なことに、様々な条件がそろってデザインや紙質を凝ったワークシートを制作で



きた。そのおかげで、多くの人が興味を持って手にとってくれた。アンケートの中にはそのクオリティをお褒めいただく声もあり、それ自体は悪いことではなかったと思う。しかしながら、つくり手の願いとは裏腹にワークシートに取り組む子どものなかには、資料そのものを見ずに、ワークシートだけを見て作業をする様子があったことは無視できない。

例えば、『黒塗牡丹唐草葵紋散詩絵箱』を題材にしたワークシートNo.1は、作品の蒔絵の文様をなぞるワークである。資料の写真の濃淡を薄く加工して掲載し、塗り絵のようにして模様を描くことで、唐草紋や葵紋に着目してもらうことを狙っていた。多くの子どもたちは、展示されている資料と見比べながら取り組んでいた。

だが一方で、ワークシートだけを見て文様を塗る姿も見られた。ワークシートはあくまでも資料を見るための手がかりに過ぎないにもかかわらず、資料そっちのけでワークシートに夢中という状況は本末転倒であった。わかりやすく美しくつくった結果の反省だった。

●最も機能していたNo.5



ワークシート本来の役割を果たしていたのはNo.5『十二ヶ月年中江戸風俗』のワークシートである。本

資料は江戸の人々の暮らしている様子が月ごとに描かれた絵巻物であるが、展示箇所に登場する人物や動物をワークシート内にちりばめ、見つけたら丸を付けるというワークである。やるべきことは単純明快で大人から子どもまで楽しめる。

そして、このワークシートは資料を確実に隅々まで見なければ完了しない。子どもたちは何度も繰り返し『十二ヶ月年中江戸風俗』を見ていた。そのうちに、ワークシートに記載されていない人物などにも目を向けることになり、知らず知らずのうちに資料をじっくりと見る経験をすることができていた。

●これからのワークシート

様々な反省点はあるものの、ワークシートがあることで、資料を見るとき新たな視点を観覧者に与えることはできた。加えて、ワークシートの該当資料を五つに絞ることで、この五つを見つければよいと、特に子どもたちはより主体的に展示を見ることになっただろう。『黒塗牡丹唐草葵紋散詩絵箱』についても、このワークシートがなければ軽く眺めるだけか、素通りしていたかもしれない。手元にワークシートがあることで、いつにもじっくり見えないような資料に目を向けるきっかけにはなっていた。

五つのワークシートをやり遂げると、たくさんのお品資料のうち五つはしつかりみたことになる。最初から最後まですべてを隅々まで見るのは難易度が高いが、ワークシートがあれば少なくとも五点は記憶に残る。そしてそれを見たという証が手元に残る。そういう「お土産感」も含めて、今回のワークシートは一定の効果があったであろう。

小さな子どもまでもがスマートフォンを持っているような時代に、紙とえんぴつだけで楽しめるワークシートをつくるのは案外難しい。できる限り多くの展覧会でワークシートをつくり、検証して、またより良いワークシートをつくりついでいきたい。美しすぎず、でも美しく、手にとりたくなるような、そして展示をちゃんと見なければ手を動かすことができないようなものを。

## 現代の超現実を探してⅢ

へエビフライはタルタルソースを食べるための棒、行為を突き動かす隠れた核心

今泉 岳大



岡部志士《碧いめまい》2013年、NPO 法人希望の園蔵

作者である岡部志士（おかべゆきひと／一九九四—）は三重県松阪市にあるNPO法人希望の園にて絵画および、絵画から派生する顔料を固めたオブリジェを制作する。岡部が制作する絵画はカラフルな色彩の抽象画である。《碧いめまい》は丸や四角といった単純なカタチが鮮やかな色彩で重層的に構成されている。

本作をよく見ると、無光沢な画面の表面に無数の細かな傷がつけられている。岡部はオイルパステルを使って画面に色面を塗り、ニードル（金属製の



岡部志士《コロイチ》2000-24年、作家蔵

針）を用いて塗り重ねた顔料を削る。この削る作業によって個々の色面が透過し下層を表象させるのだが、これは岡部にとって制作における技法であり、削ることによって発生した削りカスを用いた二次創作へのプロセスでもある。

岡部はこの顔料のカスを手で集め、手の中でまとめ、捏ねるようにしてひとつの塊にする。自身が「コロイチ」と名付けるこの顔料を固めた塊は、岡部の一連の行為—描く・削る・拾う・集める—の反復によって少しずつ大きくなったものである。カラフルな画面から削られたカラフルな顔料のかすは、彼の手の中で混色を繰り返して暗いグレーになり、あるいは部分的にそのままの色を留めて不思議な石のような物質になる。

岡部はこの「コロイチ」に強く執着し、透明なプラスチックの箱に入れ、自分の宝物のようなものとして愛でながら日常生活で携行するといふ。一方で、自身が制作した絵画にはほとんど興味を示さず、不要なものとして扱うこともある。このエピソードは、岡部の最終的な成果物が「コロイチ」であり、岡部にとって「絵画」

は「コロイチ」の材料であることを物語っている。しかしこれまで、作品制作に注力する同施設の取り組みによって、岡部の作品は主に絵画が展示されてきた。確かに岡部の絵画は美術作品として十分に鑑賞できる。岡部は絵画制作において、表面に顔料を塗り重ねて削るが、顔料を完全に除去することはなく、画面に付着した顔料は色として残り、その色面の上に同じように再度顔料を重ねて削ることによって、下層の色が表出する。この「塗る」「削る」という反復作業によってできた透明感のある色彩の断層は、平面に空間的な広がりを与えると同時に、不可逆的な時間の隠喩として絵画に時間概念を織り込んでいふ。岡部の一連の表現は、絵画を作品として見ようとする我々と、「コロイチ」を成果物とする岡部のズレを生み出す。つまり、作者が作品として提出する（岡部は「コロイチ」を提出はしないが）ものと、鑑賞者が作品性を見出すものとのズレを浮き彫りにする。

ところで、私たちの主体的な行為の動機は、分解して再考すると主題とは異なる部分に核心があることがある。例えば、エビフライが好きだと思っていたが、分解して考えるとタルタルソースが好きだった、ということや、登山が好きだという動機は隆起した地形の斜面を登る行為ではなく、下山後に温泉を楽しむため、といった願望が下敷きにある、といったように。絵を描くという行為の動機も分解すれば、塗ることが好き、であったり、画面に向き合っているながら考える時間が好き、であったり様々であるし、そもそも動機は複合的に絡み合うものである。「コロイチ」は岡部が自身の表現をフェティッシュに煮詰めた核心のようなものである。それは、多様化する現実を削ぎ落して抽出した濃密な超現実であるのだ。

連載

本多家の家臣団 4 〈本多忠勝の家臣団④〉

湯谷 翔悟

〔承前〕本多家内における御附人の位置を考えるために、本多家の分限帳を分析する。表は元和八年（一六二二）と寛政五年（一七九三）の本多家家臣団を知行高ごとに分類したものである。寛政五年を見ると、家臣団の知行が全体に大きく減少しているが、これは宝永六年（一七〇九）に本多家が一五万石から五万石に減封したためである。本多家は七代忠孝が、宝永六年に一二歳で早逝したため無嗣断絶になるところ、格別の功績ある家ということと存続が許されたが、代わりに減封の憂き目となった。

表では階層ごとの御附人とそれ以外の家の人数を示している。元和八年で最多の知行五〇〇〇石を与えられているのは、林道休直次である。彼は秀吉に仕えて森忠政に付けられ、のち福島正則に仕えた武将である。その武功を買われ、福島正則の改易後、本多忠勝の子 忠政が本多家に招き入れた。以後も本多家の客分として、別格の待遇がなされた家である。林家に次ぐ三五〇〇石は、筆頭家老で御附人の都筑家である。次いで長坂太郎左衛門家・松下三郎家（三〇〇〇石）が続くが、次いで非御附人の蜂屋将監（三〇〇〇石）がくる。

対して寛政五年では、上位三人が御附人（都筑・中根・梶）、次いで八〇〇石で客分の林長兵衛が来る。その後、六〇〇石で御附人の松下久左衛門と三代政朝の代から仕える大谷三兵衛、そして最古参の佐野、忠勝の代から仕える服部が五〇〇石となっている。

このように見ていくと、知行において客分の林を除くと、御附人の方がより上位にくるようではある。しかし、いずれ時代も御附人が上位を独占する状況とはなっていない。御附人の人数は、上位一〇人中（林を除く）で、元和八年で六人、寛政五年で五人である。また御附人は多くの階層に分布しており、御附人の中でも知行に開きがある。そうした中で、

知行高	元和 8 年 (1622)			寛政 5 年 (1792)		
	合計	御附人	その他	合計	御附人	その他
4500 ~ 5000	1	0	1			
4000 ~ 4499	0	0	0			
3500 ~ 3999	1	1	0			
3000 ~ 3499	3	2	1			
2500 ~ 2999	3	2	1			
2000 ~ 2499	3	1	2			
1800 ~ 1999	1	1	0			
1700 ~ 1799	1	1	0			
1600 ~ 1699	0	0	0			
1500 ~ 1599	2	2	0			
1400 ~ 1499	0	0	0			
1300 ~ 1399	1	0	1			
1200 ~ 1299	1	0	1	1	1	0
1100 ~ 1199	2	1	1	0	0	0
1000 ~ 1099	10	3	7	2	2	0
900 ~ 999	0	0	0	0	0	0
800 ~ 899	1	0	1	1	0	1
700 ~ 799	8	1	7	0	0	0
600 ~ 699	5	1	4	2	1	1
500 ~ 599	25	8	17	2	0	2
400 ~ 499	20	1	19	1	0	1
300 ~ 399	72	* 4	68	2	1	1
200 ~ 299	185	1	184	6	0	6
100 ~ 199	191	0	191	82	10	72
50 ~ 99				100	2	98
10 ~ 49				1	0	1
~ 10 扶持				190	0	190
				31	1	30
人数計	536	26(30)	506	421	19	399

\*は名から御附人の子弟でほぼ確実な者  
 (出典) 元和 8 年：「忠政様御代侍帳」(館蔵、和田家文書)  
 寛政 5 年：「分限帳写」(『新編岡崎市史 史料 近世』10 号文書)

各時代一箇所ずつまとめると言えそうな階層がある。元和八年の五〇〇〇〜五九九石と、寛政五年の一〇〇〇〜一九九石である。

いずれも御附人のポリュームゾーンがそれ以外の家臣より高い位置に来ており、より厚遇される存在であったことがうかがえる。一方で御附人が上位を独占していないこと、特に元和年間において御附人が満遍なく分布しており、「御附人」この階層」というグループ化ができないことが見て取れる(前回(九六号)の締めである程度のグループ分けはできそうと書いてしまったが、訂正する)。これは御附人が、本多家家臣団において相対的に有力な存在で

ある一方で、家老級から一兵卒に近い者まで広範に存在することを示すものといえよう。ごく大雑把にまとめると、御附人とは付家老と寄子(与力)が一括りにされた集団ということになる。(続)

注：御附人の知行は、元和三年に全て本多家から宛行われることになったため、それ以後は正確には「御附人の子孫(またはその家)」、「先祖に御附人をもつ者(またはその家)」と記述すべきである。しかし紙幅の都合や分かりやすさを鑑みて御附人と記している(以降の稿も同じ)。

## 博物館実習実施報告

当館では、博物館学芸員資格取得のための博物館実習を平成九年から（工事休館中などは除いて）ほとんど毎年実施しています。今年度は八月二十一日（水）から二十五（日）までの五日間で実施し、愛知県内外から集まった五人の実習生を受け入れました。芸術学や歴史・地理学、デザインなど様々な分野を学ぶ学生が集まってくれました。今年度は例年よりも比較的美術史に専門領域に近い学生が多かったです。

美術博物館の実際の現場から多くのことを学び取ってほしい、という気持ちから実習は座学よりも実践的な授業を中心とした内容で構成しました。初日はオリエンテーション、施設見学、そして当館が定期的に開催しているミュージアム講座の受付案内及び聴講



美術資料取り扱い実習



博物資料取り扱い実習

をしていただきました。初日ということとで緊張した様子も見られましたが、イベントのお手伝いではみんな笑顔で活躍してくれました。二日目は、展覧会の企画・運営、教育普及活動、そして広報活動についての授業を実施しました。広報活動の授業については実習期間中全部で四コマ設け、当館が発行している季刊誌「アルカディア」一〇〇号の編集を実習生に取り組んでもらうことを目標とし、最終日に編集案を発表していただきました。三日目は、美術・博物それぞれの資料取り扱いについて学びました。美術資料取り扱い実習では、作品の額装から壁に掛けるまでの流れを実際に作品に触れながら学びました。博物資料取り扱い実習では受け入れた資料の整理・分類・調書の作成を行いました。大学の授業でしっかりと学んできてくれたので、軸や巻子の取り扱いが非常に上手で驚きました。四日目は、民俗資料の取り扱い実習、展覧会イベントへの参加、そしてアルカディアの編集作業に取り



民俗資料取り扱い実習

組んでいただきました。資料の取り扱い実習では、緊張感をもって真摯に取り組んでくれました。私たち学芸員が普段どのように資料と向き合っているのか、その一端が伝わっていたらうれしいです。そして最終日は「アルカディア」一〇〇号の編集案の発表と展覧会ワークショップへの参加をしていただきました。「アルカディア」の編集では、著作権問題などさまざまな制約があるなかで手に取ってくれる人の気持ちを考えてながら素晴らしいアイデアを提案してくれました。実際に一〇〇号では、実習生たちが考えてくれた案をできる限り反映させて編集しました。実習生たちと共に編集した「アルカディア」一〇〇号は普段はあまり焦点の当たらない学芸員にフォーカスした号になっています。いつもとは趣の異なる面白い号なので、まだ読んでい



実習生のみなさん

Check!

実習生が編集に携わってくれた「ARCADIA」100号はここから読めます！



※来年度は美術博物館が工事休館中のため、博物館実習は実施いたしません。ご注意ください。

らっしゃらない方は是非手に取ってみてください！  
今回博物館実習に参加してくれた五名の実習生は、大学卒業後は学芸員とは異なる職種に就くと聞いています。進む道は様々でも、今回実習で学んだことが彼女たちの人生において何かの形で少しでも役に立てば幸いです。五日間、山の上にある当館に通うのは大変だったと思います。それでも真面目に、そして明るく楽しく実習に参加してくれました。さらなる目標に邁進する皆さんの今後の活躍を楽しみにしております。

## 第二期改修工事

休館期間…令和六年九月二四日

— 令和八年六月（予定）

山中 隆生

今回の岡崎市美術館改修工事（第二期）を担当している都市基盤部建築課の山中と申します。アルカディアを毎号楽しみに読んでいましたが、改修工事に関して原稿を書く機会をいただきビックリしています。私は入庁から五年目を迎えました。美術館には一年目から現地調査や第一期工事のために出入りしていました。美術館の職員ではありませんが、美術館の隅から隅までよくわかっていづつです。

美術館へ来館される皆様はこの建物に対してどのような印象を持っていらっしゃるでしょうか。「ガラス張り綺麗」「自然と一体化していて素敵」といった印象でしょうか。実際には開館から二十八年を迎えていることもあり、私にとっては「見えにくい部分で、建物に限界がきている部分が多くある」といった印象です。これも長くこの素敵な建物を使い続けていくためにこのタイミングで大規模な改修が必要であるということです。約二年間の休館期間を経てどのよう

に美術館が生まれ変わるのか楽しみにしている方もいらっしゃるかもしれません。改修項目の中には展示室の内装改修や便所改修、授乳室の設置などありますが、主には「見えにくい部分で」の改修となるため、それ以外は残念ながら休館前後の変化はほとんど感じ取ることはできません。展示スペースが広がったり、最新の機



アトリウム上部からの様子

外部全体の様子

※外壁などを補修するために建物全体に足場を設置しています。

## 鎌倉古道を歩く

～山中から藤川へ～

安本 翔音

～前回のあらすじ～九十八号より都会っ子安本少年は雨の中びしょびしょになりながら山中の古道を探り、動物に怯えながらも何とか山中八幡宮にたどりついたのであった。前回のあらすじおわり。

さて、その後時を経て、一人で山は怖いという教訓を活かし、市役所の同期二人を引き連れて歴史を探す旅に再び山中へ降り立った。簡単に仲間を紹介しよう。一人目が岡崎育ちの大学の優秀な先輩。散策中にいきなり競馬を見だし勝手に負けたのに二人目が古道を探ると言ったのに都会に居そうな山に似つかぬラフな格好で来た男である。心配極まりないが、本編スタート☆。

・山中八幡宮の脇を抜ける  
山中八幡宮の南下には細い道がある。ここは道か？と蜘蛛の巣を払いのけ進んでいくと、あるではないか歴史の跡が看板が遺されておき、古くからこの道が鎌倉古道であったと語られていた痕跡が見つけられる。そして道を抜ければ、左手には山中八幡宮の神主を古くから（おそらく中世後期頃から）務めていた竹尾氏の近世期のお墓が現れる。その後、北西へ歩みを進めるが、残念ながら工場が建っており現在は古道の痕跡はここで途切れる。ちなみに、山中八幡宮を抜けた先の字名である余田公田四段」\*とあり、その名を見るこ

・明星院の脇を通り藤川へ  
工場の周りを迂回していくと東海道の面影が色濃く残る藤川に至る。藤川宿の入り口にある明星院の脇の道も近世以前の道の名残がある。明星院のご住職によれば、昔境内を鎌倉街道が通っていたとのことである。ただし、その先の市街地方面は東海道として近世以来整備されており、痕跡はわからない。無念。

さて、研究上でも既に指摘されているが、鎌倉街道は、丘のへりを縫うように通っていることが歩いてみるとより一層感じられる。もちろん、時代によつて道の変遷は変わるため一概にはそうとは言えないが、川の水害を受けないよう少し小高いところを通っていたことは間違いなくであろう。実際に歩くことでわかる、これこそ、フィールドワークの醍醐味といえる。  
ちなみにこの歴史を探る散歩はこれからも続けるつもりである。若い人が実際に歩き歴史を感じる。詳しい知識がなくともこれだけでとても価値があるように思う。



※註 三〇七三河国山中郷南方公田等名寄帳案

『愛知県史資料編九 中世二』愛知県史編さん委員会、二〇〇五年

## INFORMATION

### “出張手芸部3 in 岡崎”を開催します!!

美術作家・宮田明日鹿氏が部長となり、まちに住む人々と手芸を学び合うことを目的に活動している「港まち手芸部」が岡崎に出張します。手芸部は、家で手芸を楽しんでいる人や手芸に挑戦したい人、また、手仕事好きな人が集まり、ともに学び合う部活です。先生や決まったルールはなく互いに教え合いながら場を創造します。当館は工事休館中ですが、継続的な教育普及活動として市内街中のNEKKO OKAZAKIを会場として実施します。

**場 所** NEKKO OKAZAKI(岡崎市康生通南3-39)

**主 宰** 宮田明日鹿氏(現代美術作家)

**日 時** 令和7年3月1日(土)午後1時30分  
～4時30分(3時間程度)

**定 員** 18名(応募多数の場合は抽選)

※席に空きがある場合はご参加いただけます。

**受講料** 無料

**申込み** 郵送、ネットからお申込みいただけます。



詳しくはこちら▶



今年度、私にとって最も大きな仕事だったのは「QuizKnockと巡る江戸東京博物館展」でした。それも終わってほっと一息という間もなく、展覧会中になかった仕事に追われています。仕事内容は多岐にわたりますが、目下奮闘中なのは、博物館資料収集委員会に向けての資料調査・整理です。収集委員会とは当館で新しく受入したい資料を専門家の先生方にご審議いただくもの。ここを通過しなければ当館で収蔵できません。

私が担当しているのは大磯義雄先生という俳諧史、主に松尾芭蕉を研究されていた先生のコレクション。膨大な数の近世の俳諧に関する典籍をはじめ、軸の絵画や古文書まで、多様な資料も含まれる資料群です。すでに「大磯義雄文庫」として二五〇〇点以上受け入れているのですが、この度新たに、購入・寄附を合わせて三〇〇点ほど受け入れを予定しています。そのすべてを一点ずつ目録をとる、という作業が大変です。

「おくのほそ道」・「笈の小文」など、聞いたことあるぞという名著が出てきたり、俳諧とは直接的にかかわらないものの興味深い資料が出てきて、大磯先生はどうしてこれを収集されたのだろう：という疑問がでてきたり。目録取りは時間がかかる大変さがありますが、バリエーション豊かな資料を手取ることでできる楽しい仕事で、やり始めたから一日が終わってしまうなんてこともあります。

これからの展覧会、研究活動に活用できるように、丁寧な調査を続けていきます。(山下)

### 今なにしているの？ その1

色々な仕事を同時並行で進めています。今やっているものをいくつか取り上げると、令和七、八年度に担当している展覧会の企画構想、研究紀要執筆及び調査、アルカディア編集作業、受け入れ資料の可否を諮る収集委員会の調査及び資料作成、市内の民家や寺院等の資料調査、収蔵庫内資料の整理、その他それぞれに付随する事務書類の作成など色々です。事務があまり目に見えない仕事ですが、ほとんどが書類作成等に追われています。

やっている仕事を大きく分けると展覧会関係、調査・研究・執筆、収蔵資料の管理の三つになるでしょうか。

- ・展覧会：展覧会は開催する数年前から企画し、構想や出品資料の洗い出しなどをします。そして今ちょうどその真つ最中です。
- ・調査・研究・執筆：ご連絡を受けて、資料の調査に駆け付けたり、整理したりしています。また、それ以外にも、収蔵資料などを調べて書いたりもしています。
- ・年末年始は執筆三昧です。

収蔵資料の管理：当館に収蔵されている資料自体も入れたら終わりではなく、日々管理・整理をしています。例えば、刀剣は錆防止のために毎年最低一回は油の塗り直しを行っています。(安本)

